とやま、祭り彩時季【九】

夏から秋にかけての祭礼と行事　写真・文／木原盛夫

とやま、祭り彩時季【九】

夏から秋にかけての祭礼と行事　写真・文／木原盛夫

CONTENTS

◯瑞龍寺の薪能（たきぎのう）・・・・4P
◯利長公の菩提寺、瑞龍寺・・・・・・15P
◯前田利長公顕彰祭・・・・・・・・・・27P
【コラム】前田利長公墓所の・・・・・31P
蓮華陽刻と大灯籠
◯おわら風の盆・・・・・・・・・・・・36P
◯風の祭り・・・・・・・・・・・・・・49P
◯越中源氏太鼓・・・・・・・・・・・54P
◯富山の祭り太鼓・・・・・・・・・・・59P
◯宮めぐり神事・・・・・・・・・・・・72P
◯まわる神事・・・・・・・・・・・・・79P
◯大仏さまのお身拭い・・・・・・・・・84P
【コラム】富山の三大仏・・・・・・・・89P
◯福岡町の「つくりもんまつり」・・・101P
◯中田かかし祭・・・・・・・・・・・・106P
【コラム】伝統を誇る福岡町の・・・・110P
雅楽団体・洋遊会

◯観月祭・・・・・・・・・・・・・・・116P
【コラム】東猪谷のサンニャサマ・・・120P
◯放生津八幡宮の霊迎式から放生会・・123P
【コラム】御幣餅と五平餅・・・・・・141P

◯瑞龍寺の薪能（たきぎのう）

８月の第４日曜日、高岡市にある国宝・瑞龍寺で高岡能楽会主催による薪能が開催される。令和元年に第３６回を迎え、夏の夜に楽しむ芸能として定着している。

薪能とは、主に夏の夜に開催されるもので、野外に舞台を設営し、周囲に篝火を焚いて演じられる能楽だ。奈良の興福寺で催されたのが最初だといわれているが、現在は日本各地の神社仏閣などで広く催されている。

能楽は日本の伝統芸能で、１９５７年に国の重要無形文化財、２００８年にユネスコの無形文化遺産に登録されている。また、瑞龍寺の仏殿、法堂（はっとう）、山門は国宝に指定されている。

国宝のお寺で、無形文化遺産の芸能を堪能できる贅沢な催し物だ。

舞台は第一部と第二部があり、薪能を含めた境内で行なわれる第二部は１７時４５分からだが、能楽会の会員が素謡や連調連管の発表をする第一部は、瑞龍寺の大茶堂で１３時から行なわれた。７人から１５人ほどで構成した１３のグループが主に素謡を発表し、途中で太鼓と笛による連調連管が披露された。

入れ替わり立ち替わりで休憩は無かったが、一曲が長いので第一部が終わったのは１７時頃だった。

５－６Ｐ：第一部の素謡と連調連管。

まだ空が明るい１７時４５分、境内の野外舞台で第二部が始まる。２０１８年のプログラムは上田理事長の開会宣言、高橋市長の挨拶に続き、金井雄資氏による演目解説と舞囃子「紅葉狩」、狂言「水掛聟」、仕舞「網ノ段」と「笠ノ段」。

これらが終わり、日も暮れた１８時５０分から火入れ式が行なわれ、住職が安全と能楽の繁栄を祈願し、１９時頃から薪能「清経」が始まった。

7P：舞囃子「紅葉狩」。
8P上下：狂言「水掛聟」。

9P：仕舞「笠ノ段」。

１０P上下：上田理事長、瑞龍寺の住職らが３ヶ所に置かれた篝火の台のまわりに集まり、一斉に点火を行なった。

１１－１４P：薪能「清経」。演能が終わったのは１９時４５分頃で、夜空には雲の間から丸い月が顔を出していた。

T09-007

T09-008

○利長公の菩提寺、瑞龍寺

富山県で唯一国宝に指定されている建造物が、高岡市の瑞龍寺。山号は高岡山。

前田利長公の菩提を弔うために、加賀藩三代目藩主利常によって１６１４年（慶長１９）に建立された曹洞宗の寺院だ。利長公が創建した宝円寺（後に法円寺と改称）が前身で、利長公の戒名・瑞龍院殿聖山英賢大居士にちなんで寺号を瑞龍院と改称し、更に瑞龍寺に改めた。

現在の伽藍（建物）がいつから造られたかは諸説あるが、瑞龍寺のホームページには正保年間（１６４４年）から利長公の五十回忌の寛文３年（１６６３）までの約２０年の歳月を要したとされている。

建築には加賀藩お抱えの大工頭、山上善右衛門嘉広が棟梁となってあたっている。

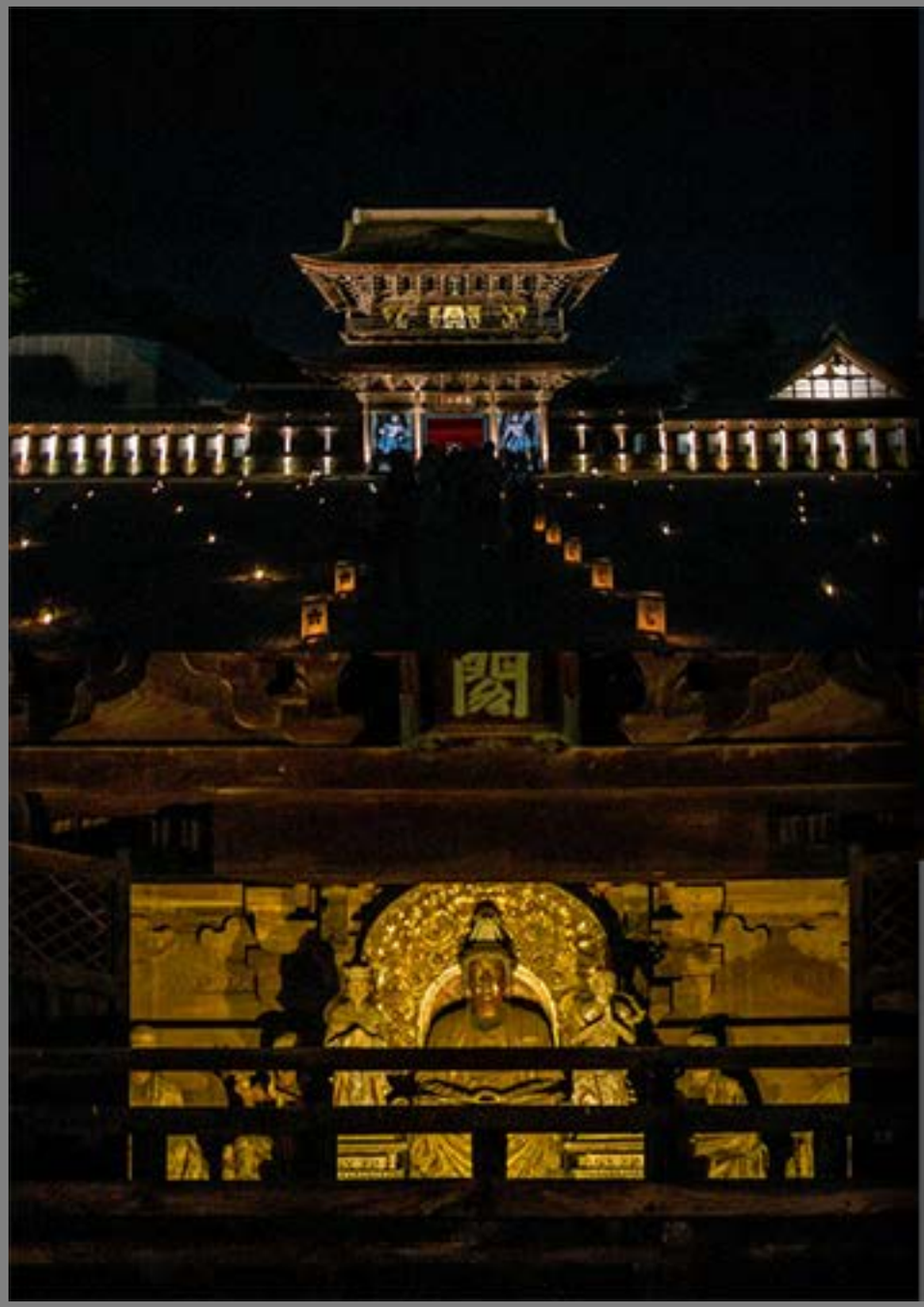
山門、仏殿、法堂が国宝に指定されている他、総門、禅堂、高廊下、回廊、大茶堂が国の重要文化財に指定されている。

利長公の命日である５月２０日には蝋燭能、６月１日、７月１日には一つやいと（お灸）が催される。また、近年は２月上旬と８月の上旬には「夜の祈りと大福市（ライトアップ）」、４月末には「春のライトアップと門前市」といったイベントが行なわれ、赤、青、緑など鮮やかなライトを浴びて国宝の建築物が暗闇の中から幻想的に浮かび上がる。

１６P：総門。１７P上：山門。１７P下：仏殿と法堂。１８－１９P：仏殿と山門。２０P上：禅堂。２０P下：回廊と鐘楼、大庫裏。

T09-011

２１Ｐ：五基並んだ石廟。右から前田利長公、前田利家公、織田信長公、織田信長公側室、織田信忠公のもので、中に宝篋印塔が納められている。



２２P上下：ライトアップ・イベント時の瑞龍寺。山門の外観と、山門２階に安置されている釈迦如来像。２３P：仏殿。２４P：仏殿の内部。釈迦、文殊、普賢の三尊が祀られている。２５P上下：法堂の外観と内部。２６P：仏殿。

○前田利長公顕彰祭

高岡開町の祖である加賀藩前田家２代目藩主・前田利長公の遺徳を偲ぶ顕彰祭が、利長公が高岡に入城した日に因み、毎年９月１３日に利長公墓所で行われる。

墓所は瑞龍寺と八丁道（約八町＝８７０mある）と呼ばれる石畳の道で結ばれている。

顕彰祭は午前１０時から１０時４０分まであり、その後、普段は立ち入り出来ない墓所が１４時まで開放される。

顕彰祭の後は、墓所の向かいにある廟守の寺として建立された繁久寺でお茶会が催される。繁久寺の回廊には五百羅漢が安置されている。

２８－２９P：顕彰祭と前田利長公の墓所。鳥居の先にお堀があり、橋を渡ったところに墓所がある。
３０P上下：繁久寺と回廊の中にある五百羅漢。

【コラム】前田利長公墓所の蓮華陽刻と大灯籠

前田利長公墓所は菩提寺である瑞龍寺と八丁道で繋がっている。大名の墓としては日本一の大きさで、国の史跡に指定されている。お墓は堀と玉垣に囲まれており、堀は小さな橋で渡れるが、門があって普段は閉まっている。９月１３日（利長公が高岡に入城した日）に執り行われる顕彰祭の日だけ門が開けられ一般公開される。なぜ普段は開放されないのか市の職員に尋ねたところ、この墓所は前田家の私有地なのだそうだ。

利長公の御廟は１３０枚の戸室石製の蓮華陽刻で飾られている。基本は蓮の葉の向きが左右で異なる２パターンだが、一枚だけ模様の異なる陽刻がある。この一枚だけ違う絵柄の陽刻を開けると通路になっているという都市伝説のようなものを聞いたので、顕彰祭の日に高岡市の職員の方に聞いてみたがそのようなことはないそうだ。しかし、なぜ一枚だけ違う絵柄なのかという理由も謎のままだという。

３２P上：利長公の御廟。
３２P下：陽刻の基本的な絵柄。葉の向きは左右２パターンある。
３３P：一枚だけ絵柄の違う陽刻。御廟の後ろ側の一番上の段の中央にあった。

墓所の入り口、鳥居の前には一際目につく大きな灯籠がある。日本三大化灯籠というのが上野寛永寺東照宮、尾張熱田神宮、京都南禅寺にあるそうだが、それらに匹敵する約６.８ｍの高さだという。本来灯籠は２つで一対だが、運搬中に石材の一部が千保川に沈んで片側だけになったという。その川に沈んだ大灯籠の火袋が、高岡市鵜島町の教恩寺の境内にあり、石碑の台として使われている。

３４Ｐ：前田利長公墓所の大灯籠。
３５Ｐ：教恩寺にある大灯籠の火袋。

◯おわら風の盆

夏の終わりと同時に、秋の始まりを感じさせる越中八尾の「おわら風の盆」。風の盆とは立春の日から２１０日の風の厄日（台風等の風の被害が多い頃）で、９月１日から３日まで開催されている。

どこかもの悲しい胡弓の音色と、顔が見えそうで見えない編み笠をかぶって坂の町を流す優雅な踊り手。風の盆期間中、人口２万人ほどの山あいの町に、県内外から３０万人ほどの観光客が訪れる。

おわらの起源ははっきりしないようだが、「越中婦負郡志」にると１７０２年（元禄１５）３月に、加賀藩から下付された「町建御墨付」を八尾の町衆が、町の開祖米屋少兵衛家所有から取り戻した祝いに、三日三晩踊り明かしたことが始まりとされている。

この辺りの詳細は『風の盆　おわら案内記』（言叢社）に、次のような記述がある。

＜八尾町建ての功労者・米屋少兵衛は代々御収納銀請負を職として、藩への御収納銀を納めることのできない者の一時立て替えの業を行なってきたが年々貸し倒れが多くなり、ついにその業をやめて八尾町を立ち退き、野積の水口村へ転退したという。この時、八尾町建てに関する書類を残らず持ち去った。～略～困った町役人たちは一計を案じて、花見がてらにかこつけ多くの芸人をともなって米屋方に押し掛け、酒宴にまぎれて書類を取り戻した＞

これをきっかけに盂蘭盆会（お盆）や、風の盆に風神鎮魂と豊作祈願を込めて踊られるようになったとされる。

おわらの語源については、唄の中に「おわら（大笑い）」という言葉を差し挟んだからとか、豊年を祈年した「おおわら（大藁）」や、小原（おわら）村の娘が歌い始めたからなど諸説あるようだ。

３８P上：駅から歩いてい井田川を渡ると旧町。
３８P下：井田川に架かる橋には、おわらのレリーフが。

and more...